

第4回牧之原市教育のあり方検討委員会 会議録【概要】

1 日 時 平成30年7月25日(水) 13:30~16:30

2 場 所 牧之原市役所相良庁舎3階会議室

3 出席者

(委員) 島田桂吾、野村智子、佐藤利彦、池ヶ谷祐太、橋山妙子、今野英明、中島佑実、石井眞澄

4 協議事項議事録【概要】

(1) キャリア教育を軸とした小中一貫教育は有効か。

※ 全員から有効であるとの意見有。

- 視察に行く前は小中一貫教育という言葉しか分からなかったが、小中一貫でやることの意義があり、有効であると感じる。やさしい子どもが育っているし、教師の考え方も統一されて一本筋が通っている。キャリア教育についても同じ。
- 牧之原市で小中一貫教育を進めるには、熱意がある人が必要だと考える。
- 自分の子どもは単学級の学校に通っていて、子どもがずっと同じメンバーでいることが気になっていた。多くの中で育った方がやさしい子が多いとか、子どもにとってもいいことがたくさんあると感じた。
- 市は、意見を伝えていける組織をつくり、フォローもしていく。何のために一貫教育が必要かきちんと伝えることが必要。発信を丁寧にしていける組織があるといいと思う
- 子どものためにこういうことをやっていた方がいいということ、地域の人たちにも言うていくことが必要。モチベーションを共有する。
- 保護者が知らないことが多いと思う。いろいろなところで発信する。子どもは大人を見ているので大人がしっかり知っていてほしい。
- 小中一貫教育は有効を試してみる価値があるが、小中一貫教育と義務教育学校とイコールで考えてしまっはいけないと思う。小中一貫や連携、中高の連携を進めることによって、自然に「ここは一緒にやっていった方がいい」という機運が生まれてくる。実際にやって試しながら、できるところからやっていく。先生も行政も連携ということを頭に入れていく。
- 地域や小学校が、小中一貫や連携をやろうと思わないと形だけになってしまう。教員だけとか行政だけ、地域だけでなく一緒に教育環境をつくっていけたらいい。コミュニティスクール等でどんな連携が取れるか考える。
- 視察先の学校は、小学校と中学校のギャップをなくして教育効果を高めたいという思いで、決して、国の方針や子どもが少ないからという理由ではない。子どものためには何が大事か。そこをしっかりと考えた結果、小中一貫になっている。全教員が小中学生の学びと育ちに責任をもつ。この結果が小中一貫校になったという風になっている。
- 何をやるにもメリットとデメリットがあると思うが、デメリットを消す努力をしていく。
- 主にやっていくのは先生になる。シラバス等、9年間でこうしていこうということ、地域も含め、みんなで共有していく。

- 成長期が2年早まっているというデータがあるが、その通りだと思う。小中一貫教育を導入するには、先生は大変だと思うが、がんばってもらいたい。
- 教職員の小中学校の人的交流や指導の共有、中1ギャップの解消ができることから、小中一貫教育は有効だと考える。しかし、中1ギャップを解消することがいいのか疑問。変化の中での育てるという方法もある。これから市内外から多くの人を取り込みたいということになると、子どもたちが変化に対応できるということも大事だと思う。
- ある程度の人数がいると人間関係のバランスも学べるので、これ自体がキャリア教育だと思った。
- 先生が同じ目標を持っていることで学年が変わっても先生の言うことが変わらない。9か年で学んでいるのは子どもたちには幸せだと思う。教員が移動しても学校として目指すべき方向が示されていれば安心。小中学校のそれぞれの文化がある。校長先生の元で「こういう学校をつくっていく」ということがあれば教員も熱意が出る。今の状態で教育課程をつくるのにも苦勞をしているが、9年間となるとしっかりとした教育課程を組んでいかないとと思う。
- 1クラスの数は少人数がよいと思うが、それと小規模校では一緒ではない。クラスの人数は少なくとも、学校の人数は多い方がいい。
- 実際に中1ギャップは中学校にいて感じる。子どもや親が、環境が変わることでの不安を感じている。
- 学習内容的には、教員は小中交流する方が効果がある内容が多くなっていると感じる。
- 小中一貫教育にすると、中学校に上がる時の変化に対応できても、高校に上がる時に環境が大きく変わる経験をするので、それに対応できる強さをどうやって育てていけばいいのかということも考える必要がある。キャリア教育という軸もあるので、どうやっていけばデメリットになりそうなことを解消できるかということを考える。
- 子どもをどういう風に育てるか誰もが分かるようなキャッチフレーズがあるとよい。市全体で進めていくために目標を分かりやすい形として共有することが大切である。

(2) 家庭・地域・企業がどのように関わるのが有効か？

- 小中一貫教育が縦軸ならば、社会との協働は横軸、底上げをするものだと捉えている。教育は学校で行われていると思っている人も多いが、実際は地域でも育てている。地域、家庭、企業等が教育に携わっているが、関わっている人が「教育をしている」という意識を持っていないには、横軸が通っていないから。牧之原市に横に一本筋を通したい。単発でなく、横軸になることで底上げがされていくと考える。
- 企業と地域がどれだけ協働するか。例えば、会社の外国人従業員と小学生が交流して、英語やその他外国語、異文化を経験させることもできる。一緒にやるというのも有効的な手段だと思う。
- 地域、企業の関わりは今もないわけではないが、多いわけでもない。キャリア教育を軸として考えると、学校として困っていることを素直に発信すればよいのではと思った。
- 地域と家庭の連携することは大切だと思う。保護者だけでは限界があるので、区を巻き込

んで一緒にやれたらと思う。

- 学校が何をしてほしいか伝えることや困り感を発信したりすることが大事。ただ、どこに発信するのかということがある。コーディネーターがきちんといることが必要。先生だけでは限界があるので組織的に動くことが求められる。
- 学校以上に家庭は意識が多様なので、いろいろな協働の仕方を考えないといけない。困ったということと言える場が必要。
- 対話をする場があると、頼みやすいし、企業同士でも聴きやすくなりネットワークをつくることができる。同じ土俵で話ができることが大事だと思う。
- いろいろやっているが一つになっていない。まとまる手段、つなぐ仕組みの1つとしてコミュニティスクールは有効ではないか。コミュニティスクールの元を中学校において、9年間のカリキュラムを承認して、実働部隊となる支援部会のようなものを小学校に置くということもできる。権限をどこまでおくかということは課題。
- 教員は自分で何でもやろうとしてしまいがちで、子どものためにとすると余計にやるので結局は多忙化になる。子どものためでもすべて教員がやるということがいいというばかりではない。教員としてどこまでやるべき、どこにヘルプを出すか、ということを確認にする。
- コミュニティスクールは、地域の人が必然的に学校を見る仕組みだと思う。細かい単位がいいと思う反面、母体に力があることが大事なので、ある程度人数がいるとよい。
- コミュニティスクールには、多様な人選をして、批判的なことを言う人も必要。牧之原ではどういう形が形骸化しない仕組みとなるか。
- とりあえず試してみることをしたい。コミュニティスクールの形はいろいろあるので検討しないといけないが、うまく活用したときのメリットは大きいと思う。

(まとめ)

- 9年間の連続した学び。そこにつながるためのコミュニティスクール、小中一貫の学び、キャリア教育があり、それを実現するための仕組みが必要。試してみないと分からないので、多様な人の意見を聴きながら進める。カリキュラムに関わるといって学校の先生と情報共有も大事。